潮論

ベトナム革命の素顔　石川　玄造
映画評『わが青春のとき』　山上　春彦
書評『遊戯と労働の弁証法』　林　光晴
状況、そして立場　奥沢　邦成
SIC通信　CIRA・NIPPON国際通信部

ベトナム革命の素顔

―解放サイゴンの軍政―

石川　玄造

サイゴン政権が粉砕され、解放軍が入城したときには勝った、勝ったと大騒ぎだったね、ほかでもない、この日本でだ。どこの党派も手ばなしでわがことのように喜んで、津村喬なんか「戦争が革命をひきおこし、革命が戦争を終らせる」だなんていきがっちゃって、白けちゃうんだな、全く。そいつは本質的なことじゃない。

サイゴン大衆はどうふるまったのか。もうどう考えてもサイゴン陥落が火を見るより明らかになった四月二十九日になって彼らは一方ではせっせと青と赤と黄の旗を買い求めて切り張り臨時革命政府の旗をつくりだし、他方では手あたり次第に略奪をはじめた。そして異常に多くの人びとが海へ海へと避難をはじめた……。いったいこれはなんだ？

旗は五月一日になって大統領官邸をうずめたデモにたずさえられ、市中のほとんどすべての建物にすえつけられた。米軍関係者、かいらい政権の高官、彼らと結託した犬どもが総徴収した建物からは家財道具をはじめとした金めのものが次々と運びだされ、翌日には堂々とヤミ市で売りに出された。酒保や商店からの掠奪品も公然と売られ一週間たっても掠奪はおさまる気配をみせなかった。そして避難民は保存食糧がきれるとのこのこと再びサイゴンに舞い戻ってきた。どいつもこいつも要領よくやってるじゃないか！

解放軍が入城して二十日もたったころ、ひとりの男が、反革命テロのかどでつかまり公開銃殺処刑されたというニュースが伝わった。あゝ、こいつにとって主人の入れかわったサイゴンは確かに革命だったのだなあ、とおれは思った。

×　×　×

臨時革命政府はサイゴン・ジャディン地区軍事管理委員会を設定して次々に「革命政治」をはじめた。最初の問題は治安の維持と人民の正常な生活回復とであった（5・8 チャ・バン・チャ記者会見）。すなわちサイゴン市内を町内会単位で組織した人民革命委員会を原動力に、かつての中国の文化大革命の紅衛兵さながらの乱暴な整風運動を利用した革命勢力中枢の旧政権下のイデオロギーの一掃を前提とした「布告」による政治。

次の問題はサイゴン経営である。旧政権や米機関を支えていた企業といわゆる欧米的な消費生活を供給するための企業の活動停止にともなう失業者七十万の処置、戦争中に流れこんだ難民の処置を当初は米の無料配布によって支えていたものの、これを永続させるわけにいかない軍事管理委員会は百万人にものぼる大規模な帰郷・下放運動を組織しはじめた。

これらと並行してサイゴン市内では文化革命、すなわち革命文化観の押しつけ運動が展開されている。われわれが断片的に知らされるサイゴンからの報道に依拠するかぎりでは革命政府の革命観には過去の革命の水準を凌駕する何ものも見出すことはできない。文化革命の現時点までの進行過程では中国の文化大革命の二番煎じ以外ではない。

政治的には北ベトナム労働党の圧倒的な南ベトナム政治への介入が特徴的にあらわれている。これは五月十五日の祝勝式典での序列席次によって白日の下にさらされた。われわれによく知られた解放戦線議長のグエン・フー・トは第三位、臨時革命政府首相のフィン・タン・ファトは第四位であって、首位、次席はともに労働党南部委員会のファン・フン、グエン・バン・リンによって占められていた。

はっきり言って今までのところベトナム「革命」から積極的に学ぶに値する思想的価値は全くない。革命の指導者は柔軟であるとは言えるが思想的にはきわめて貧困な部類に属する共産主義者にしかすぎない。いいかえればアメリカ帝国主義を駆逐するために必要な思想的水準は民族主義とそれに付帯された民主主義で十分まかなえるということである。社会主義的な経済政策は作動していない。今のところ予想できるのは外資系企業の接収とその国有化、流通機構の国家的統一というようなみなれた社会主義であってその内容は南の北ベトナム化の域を出ない。接収を一挙的に、何の保障もなしに、つまり革命的にやるかどうか、おれは興味深くみつめているところだ。アジェンデはドジッたからな。

× × ×

率直に感想を述べさせてもらえば、ベトナム革命の実相が中国的文化革命と都市からの下放帰郷運動ではじまったことに、おれは深く失望した。そのうえこれらは人民大衆の創意によるものでなく（あたり前だ、創意だったら何かしら目新しいものだからな）、共産主義者の政策として実施された大衆操作である、ということに。これは予想された事態だった。ベトナム戦争はその当初からアメリカ帝国主義を全土から駆逐し、そのかいらい政権を打倒する解放勢力の軍事的な勝利によってしか終結しないことは、当事者のみならず全世界の識者にとって自明のことであった。解放闘争の理念は一九五四年のジュネーブ協定の完全履行であり、政治的ヘゲモニイは一貫してベトナ

ム労働党――ベトナム人民革命党によって確立されており、背後にはソ共、中共の軍事力、政治力がひかえていた。革命の未来がこういった政治的条件によってまえもって決定されているなんてこんな味けないはなしはない。この味けなさを助長したのは他ならぬサイゴン市民だった。彼らは解放軍入城の文字どおり前夜まで、どうせなるようにしかならないといったふうにいっこうに何もはじめなかった。すべて解放軍にまかせっきりだった三百万市民の頽廃は、ベトナム革命の巨大な負性であるといわなければなるまい。どんなに疲弊していたとしても、これには同情の余地はない。ポルトガルではサラザール以降独裁圧政の四十年間にもかかわらず国軍運動、共産党のさらに左翼にさまざまな傾向の闘いが、さながら雨後の旬の子のごとく登場して弾圧をかっくらっている。極左冒険主義＝革命的左翼急進主義は過去のどんな革命にも流動する政治情況の中で、ほとんど不可避的にあらわれ、少なくともわれわれに貴重な体験と情報だけは提供して、われわれを勇気づけたものだ。キューバで、中国文化大革命で、チェコで、パリで、チリで……。しかし、ごらんのとおりサイゴンではもうダメだ。

ホー・チ・ミンは「独立と自由は人民にとってもっとも大切なことである」と言った。独立も自由も与えられるものではない。だからそれらは「人民の自由」「人民の独立」でなければならない。帝国主義的な抑圧から解放された人民はすぐに共産主義的な抑圧の下におかれ、共産主義から相対的に独立した政治的に自由な下からの運動も組織もわれわれにはまだ知らされていない。芸術文化的活動も解放軍入城後一週間目の七日には作家芸術家解放同盟が結成され、「革命の成果を讃え、戦争中の誤った傾向を払拭し、祖国の将来のため建設的思想をもって進歩的芸術運動を行う」というふざけた目的志向性の、政治のたいこもちをはじめてしまった。政治や政治思想に従属した芸術などははじめからどんな革命的可能性ももっていない。

今、サイゴンではジャズもロックもソウルも、ダンスも御法度である。そのかわり民族音楽が流されている。映画も芝居も検閲されている。そのうえ旧政権下に発刊された書物はすべてダメであることになって（5・22布告）、焚書運動が盛んであるとなったら、この世は闇も同然ではないか。服装もがらっとおとなしく質実剛健といったふうになっているらしい。こういうことは些細なことではない。おれは断言してもいい、やつらは自由とは何なのか全くわかっていないのだ。

くりかえしになるが、国粋主義的民族伝統文化の復権を軸にした文化的ショーヴィニズムと政治の文化に対する優越性を基調とした、芸術運動の推進に象徴されるようなベトナム革命の現段階的実態は、かなり低級のしまりのない革命であると印象づけられる。

果敢不屈に闘った数限りない英雄的兵士を擁する解放戦線におれはどうも過ぎた評価を与えすぎていたかもしれない。

ともあれ解放戦線が遂にサイゴンを陥れ、長かった戦争を終らせた。ベトナム革命勝利万歳のかけ声が一段落した今、われわれはベトナム革命がどんな政治と社会を実現させようとしているのか、続けて注意深く観察しなければならないだろう。そして革命の内実を批判的に検討することをとおしてわれわれ自身を思想的にも実践的にもきた

えていくことが、長かったベトナム革命闘争、ほかならぬわれわれを育て、きたえたベトナム革命戦争との連帯そのものなのだ。

（資料は全て朝日新聞に依った。ただし五月末日付まで）

一九七五・七・九

映画評

『わが青春のとき』（森川時久監督）

山上　春彦

最近これといって面白い映画がなく、本欄で何を紹介しようかと迷っていた矢先に日共・宮本ポルノ規制発言があったので、ポルノ映画紹介をするのは単純すぎるし日共文化路線のダメさ加減について書いて見ようということで、「若者たち」シリーズの監督として日共が推薦する森川が、日共に期待する山本圭などを使って撮ったこの作品を取り上げることにした。前号に引き続きつまらない映画の紹介で申し訳ないが、日共路線が浸透すれば、日共映画はもっとダメになるという見本がこの作品である。

最近の日共は得票量増大のためには何でも言ってみるものらしいが、ポルノ規制についてはアホらしいとしか言いようがない。大体、公務員や教員が自己の労働の質についての自覚に欠けているとすれば、それは組合を自己の形成・自己解放のための教育の場としてではなく物とり・票とりとしてしか位置づけてこなかった政党支配の必然の帰結であり、他の労働者よりも彼らの労働条件がよいというのなら、彼らに自己規制を求めるよりも、他のとりわけ未組織・零細の労働者の労働条件の改善に全力をあげるのが筋というものだ。ポルノにしろ、他の自由が規制されている中で自己規制を強いられながら苦闘している最中なのだ。このワイセツの規制からすべての自由の抑圧が始まることは、それが最も旧来の倫理に訴え易いことからも明らかだろう。それは私たちの存在の、生命の基盤である性を支配管理し、あらゆる自由を制限するということになることは本誌の読者なら先刻十分承知している筈なので多言すまい。

この映画は、おそらく日共ポルノ規制を先取りした日共型《政治・青春》映画として記憶していいものになるだろう。健康的にシラジラしく作られた画面は、グロテスクなほど不自然ですらある。

メイン・ストーリーである《不倫の恋》に踏み込む栗原小巻は（「忍ぶ糸」「忍ぶ川」や「モスクワ・我が愛」ではオッパイぐらい見せた気がするが）、恋の相手の青年医師（山本）との濡れ場でも肩から上しか見せない。入浴シーンですら同じく肩までしか見せず、テレビCMの○○石ケンを思い出させるほどで、後で宮本発言を見てやっと納得がいくといった不自然さである。

山本の青年医師も相当に政治的にグロテスクである。この青年は、幼年時から大逆犯・天皇狙撃者（難波大助と推定される）の甥として苛酷な状況で育ったと説明されるのだが、彼の精神形成過程や現在の状況把握、あるいは生活そのものの描写が欠落していて、言葉（セリフ）でのみ苦悩と意

識を強調するので、彼の存在が本来有している生活（政治性を含む）が全体の状況とどう関わるのか見えてこない。彼の勤務先の病院長（小林桂樹）についても同じようなことがいえるし、舞台となった敗戦間近の朝鮮でも抗日・朝鮮独立運動グループについても同様である。この映画で唯一存在感のあったのが、栗原小巻の夫で、一代でたたき上げて資産家となり、軍の御用商人として朝鮮人の反感をかっている新聞社主を演じる敵役三国連太郎のみであるのは、三国が独自の存在観を示す役者だからとばかりは言えないだろう。森川が、何を勘違いしたのか、ラブ・ストーリーの上に日共型ポルノ規制と日共型政治性を切り貼りすれば、すばらしい《政治・青春》映画ができると思い込んだためだと考えられる。

原作（新日本文学会に属して日共とは一線を画していた故小林勝の作品）を刈り込みすぎ、焦点を青年医師と軍御用商の若い人妻との不倫の恋において、適当に反軍・反戦と抗日共産ゲリラ・朝鮮独立運動の話でもあしらっておけば、青春映画として観客も動員できるだろうし、政治的にも何らかの意義を持つだろうと目論んだとすれば、これほどオメデタイ話はない。まして、監督も俳優たちも、そして新生大映もその第一作としてこれに真面目に取り組み、新しい《政治・青春》映画を作ろうとしたことが伝わっているだけにこの失敗は滑稽ですらある。前号の特集で西田弘和氏が指摘した「徒労であることと真面目であることは問題が違う」ことを、この作品も、その出来栄えと興行成績で証明しているわけだ。

それにしても、小林の原作では天皇制と朝鮮人対日本人の二点については、もっときっちり書き込まれていたのではないか。これをあえて欠落させ、必要以上に刈り込んで単なるラブ・ストーリーに仕立てあげて、作品の政治性と恋の燃焼の烈しさの双方の生彩と存在感を失わせたのは、天皇制・朝鮮・ポルノに関する日共路線の先取りの結果だとすれば、それなりに納得が行かないこともない。

ともかく、同時期の映画では朝鮮人問題については、抑圧と蔑視から自己防衛のために形成された暴力団（山口組系柳川会がモデルか？）を描く東映「京阪神殺しの軍団」が、青春映画としてはATG「めぐりあい―鷗よ　きらめく海を見たか」がよほど充実していて面白かった。（大映作品）

書評

『遊戯と労働の弁証法』（大沢正道著）

林　光晴

著者は本書の執筆の動機について次のように述べている。（『黒の手帖』一〇号）

「こんにちにおける新しい理論、そしてイデオロギーの構築において主要な課題のひとつとして遊戯の観念の回復がある。これまでの社会主義は、マルクス主義もアナキズムも労働こそ自由の表現である、というマルクスのテーゼを暗黙のうちに根本前提としてきた。しかし、このテーゼは、『労働は自由の実現の前提であり、

遊戯は自由の表明である』と書き改められる必要がある。

それは第二の全体革命の問題と関連している。いま追求されている全体的人間は、労働＝生産の次元では決して実現されない。すべてを労働＝生産の次元に還元する思想は福祉国家の思想であり、ソ連型マルクス主義の思想であり、その行き着く先は管理社会である。

全体的人間が実現されるためには遊戯＝想像力の次元が開示されなくてはならない。人間のなかの日常性＝相互扶助・労働と、反日常性＝反逆・遊戯という両極をつなぐ回路が設定されなくてはならない。この回路が、相互に拒否されている現状では、全体革命のエネルギーは、決してスパークしないからである。」

こんにちの社会は国家を前提とした高度に工業化した管理社会へ向かっている。そのことは労働者の解放を目ざすマルクス主義国家ソ連も例外でない。なぜこのような状況が生まれたか。それは労働を自由の実現とするマルクスのテーゼを暗黙のうちに根本前提としてきた社会主義諸勢力の発想そのものに誤りがあるのではないか。ぼくらはもう著者が何に向かい、何を武器に、どうしようとするのか知ることができる。著者は労働の本質が自由実現とするといいこの本質の矛盾を解消するものとして遊戯の観念を回復させようと試みる。確かに著者のいうように、人間が望んできたことは、搾取からの解放よりももっと進んだ労働そのものからの解放であろう。ここをみない限り、労働のなかに自由があると自分を無理に納得させる倒錯した状況が生まれざるを得ない。労働の本質の矛盾はなにか。ぼくらが労働するのは飢えと渇きをいやすためだ、この飢えと渇きは生命体が内部平衡感覚を保とうとするためにおきる。つまり労働とは飢えや渇きをいやす手段・前提であっても、それ自身、飢えと渇きがいやされた状態とは違う、その意味で労働の本質は苦痛なのだと著者はいう。これに反して、遊戯の本質は想像力にあり、想像力は人間という生命体の過剰なエネルギーの消費活動によって生まれるという。想像力は現実の世界を超えた、非現実、非存在の世界を意識的に作りあげる能力である。労働は欠乏を契機とした生産、遊戯は過剰なエネルギーを契機とした消費であり、この二つは全く逆の方向性を帯びている。また労働は労働対象に働きかける行為だから、物と自己を分ける意識であり、遊戯は自己と他を隔けあわせ全体性の体現を志向する意識である。この二点が遊戯と労働の本質の違いである。だが、遊戯と労働に共通するものがないわけではない。それは社会的欲求であり、リズム性である。この共通する二点が強調されるとき遊戯と労働とがいちじるしく接近する。遊戯と労働との対立や一致は、全く異質か、全く同質なものの対立もしくは一致とは異なり、異質なものと同質なものとが、一組の切り離し難い関係のなかで共存しているのである。

生命体である人間のもつ本能とさえいえる遊戯と労働、この遊戯と労働が、著者がこの本を書くにいたった動機「労働は自由の実現の前提であり、遊戯は自由の表明である」のように、あるときは平衡し、あるときは動揺して無限運動を行う。この運動を行う弁証法的関係のなかで遊戯は遊戯としてのその生命が持続され、自由の表明が行われる。

こんにちの遊戯の位置は明日への労働意欲を駆り立てるためになされるものと考え

られ、それは労働礼讃を軸とした従属的地位である。また、遊戯は余暇とからまって論議され、余暇産業という巨大企業下に誘導されて遊戯がなされている。余暇産業の生産高をあげることにもっぱら奉仕している。それは遊戯の本質である過剰なエネルギーの消費行為に反し、第二の労働行為である。遊戯と労働とは同質性をもつが、しかし、まったく同じものにはけっしてならない異質性をもつ。だから、遊戯と労働とは区別されるのである。

以上がこの本の要点である。次にいくつかの注文をだしたい。

まず管理社会のなかで自由を表明する、遊戯する者が行きつく社会はどういうものになるのだろう。遊ぶ人は管理社会でも、あるいは他の好ましくない社会でも、疎外されることなく、自由を表明する強じんな人なのだろうか。

次に、マルクス主義、アナキズムが労働は自由の実現という共通した認識を持つと著者はいうが、もしそのことが本当なら、それは近代人の意識と深く係っていることを思ってみなくてはならない。近代人の美意識のひとつには、汽車が定刻にきっちりと来る驚きがある、それは規則的なもの、彼が期待したところのものが期待されるように行われることへの愛着である。マルクス主義者もアナキストも期待し、期待されることが行われるよう努力しているのである。わけのわからん、いらいらするこんにちの社会でも、行おうとしている者がいる。技術文明が滅びない限り、管理的な要素は一掃されないとすれば、行うことは、この社会の人間の関係を糺すことである。

状況、そして立場

―アナキズムの自立とは？

奥沢　邦成

一、爆破をめぐって

企業連続爆破事件の容疑者逮捕・起訴の過程で展開されたすさまじい〝反アナキスト〟キャンペーンがわれわれに動揺を与えたことは確かである。その動揺がどういった内容のものであるかは様々であろう。ある人は眉をしかめて困惑し、ある人は彼らが本当にアナキストなのかどうかの判定に首をひねる。また他の人は痛快事として語り、寛容らしく俎上にのぼらせ、あるいは何とはなしに負い目を感じ、また沈黙するといった態度がみられた。ぼくもとまどいを感じた部類だが、それはいまさらの〝反アナキスト〟キャンペーンに対してであり、またわれわれの周辺にみられた以上の対応の仕方に対する一層のとまどいをも含んでいる。

まず、今回の事件に関連していくつかの問題点と意見を述べておきたい。

1. 東アジア反日武装闘争であること。それは彼らが何を問題とし、何に対して闘ったのか、その思想と行動を一定程度理解しうる限りにおいて、単なる爆破事件としてではなく、一つの闘争であること。しか

しこの見方が、それ単独で成立しないことは言うまでもない。今回の事件を個々人が自分の立場に引きつける以上、それは単に共感、志向上の短絡にとどまってはならないだろう。

2. 死者を伴ったことに関しては、まずそれが意図されたものでなかったこと（経過を辿れば明らかである）、しかし結果（過失）として生じた範囲に対して責任を負うべきである。これはいかなる目的も、その手段（過程）を正当化しえないという原則に立つからであり、その責任は、法的意味ではなく、道義的かつ思想的責任を意味する。われわれは、自己をはじめその成員個々人がよりよく生き得る社会の建設を目指すが、そうした目的と過程の離反がもたらした現実が、いかに目的から遠ざかるかという社会の力学を歴史の教訓として受けとめている。

3. これと関連して、死者が応々にして軽んぜられること、むしろ触れたがらないと言った方が適切かも知れないが、この点に異議を述べておきたい。それはもっとも揺り動かし難い事実であり、それが方法そして思想の偽わらざる具現であると考えるからである。それ以上に、その事実は「殺される側」に居るというぼく個人の自覚と共鳴する。体制によろうが、あるいは他の大義によろうが、それは「殺される側」にもたらす事実をいささかも変えないからである。

4. 暴力とか武力が、他に対する物理的強制を目的とすることはいうまでもない。ぼくはそのことの意味と現実を、行使者が自らに課す限りにおいて、その行使の不能性を保留したいと考えている。この立場はテロリズム（ある目的のために恐怖手段を行使する）とは異る。行動過程の暴力的契機とテロリズムとを峻別するのは、思想内容である。

5. 東アジア反日武装戦線の思想内容をまだ把握していないが、われわれは七〇年代に顕著となった左翼による暴力・武力の問題という視点から、われわれの主張を展開する必要があろう（この問題は他の機会に述べたい）。今回の事件に限れば、爆破行為が彼らの思想・志向にどのような位置づけをもっていたのか、ここから彼らに対する思想的責任が解明されると思う。

6. キャンペーン化された報道に対しては、イオムの会・無政府主義者連盟関西および東海地方準備会・リベルテールの会・リベーロ社の連名による「抗議文」（六月一日）が、報道機関と関係者に送られた。この速やかな対応には敬意を表する次第である。

以上、気のついた点をまとめてみたが、機会を改めて詳論したい。不十分ながらこうした形で表明する必要を感じたのは、次のような理由が多少とも働いている。

東京のある集会で、彼らがアナキストか否かの規定をめぐって話し合われたと聞いた。御丁寧にも当事者の兄弟の出席と発言を要請したらしい。アナキストかどうかの認定という対応は滑稽であるよりも、ちょっと異様である。われわれはマスコミによる〝反アナキスト〟キャンペーンに怒りを覚える。それはあくまでも事実の報道を信条とするマスコミの、事実と異なるレッテル貼りに対する抗議である。

しかし、そうしたマスコミとさして変わらない対応がそこにみられはしないだろうか。彼らの考え、思想、行動についてどのような討議があったのかは知らないが、必要なのはレッテルや呼称の採否ではなく、

その内実、思想と行動とを検証することではないだろうか。そこに自己主張があり、他人との異同があってこそ、連帯が可能となる。それは入手可能な情報の範囲で自らが表明することであって、仮に他からの判断を借用するならば、その問いかけ自体が意味をもたなくなろう。

もし彼らが、アナキストを自称し、明言しつつ行動したとするなら、どう対応するのか。こう考えると、われわれはもしかしたら〝アナキスト〟のレッテル以上のものをもってはいなかった、少なくともレッテルの内実を提出することを怠ってはいなかったか、という自問から逃れられなくなる。

二、ある批判をめぐって

「展望なきアナキズム研究センターの活動」という批判がかつて友人から寄せられた。さらに、展望を明確に提示せよと要請されたのであるが、ぼくは他の人々に示し得る展望をもち得ていない、と答えた。そう答えつつ、展望とは、センターの活動にとって展望がどう位置づけられるかを考えたことがある。その結論は、しごく簡単なものでしかなかった。

われわれ（明確な展望を示すことなくセンターの活動を主体的に取り組んだメンバー）は、もとうとしても展望をもつに至らなかった、ということである。ふり返ってみると、われわれは、われわれ自身の志向と力量とによる主観的な可視範囲の諸活動に取り組み、それらの成果の全体がセンターの現状であるということである。

展望が、設定された目的の実現のための現状分析実現と過程の青写真であるとするなら、これまでのセンターの活動は、暗中模索であり、目前の諸課題を手探りで解決していくことの連続であった。それを行き当りばったりの活動と評することもできようし、その意味では展望なき活動の連続であったことも否定できない。こうした活動方法がわれわれにとって唯一の形態であったとは少しも考えないが、こうした形しか取りえなかったことの方が、切実であり、われわれにとっては重い。

それはおそらく、個人の条件・状況下で主体的諸条件を対置しつつ規定されることなのであろう。一つの志向を取り巻く状況が、連帯しうる思想・運動上の、客観的評価に耐えうる何らかの基盤、条件を見出すことができないなら、人を説得しうる確信に足る展望を指示することは困難であろう。またそのための努力が、その試み全体にとって有効であるのか、優先順位をもつのか、という疑問も生じる（必要でないということではない）。

こうした状況の下で可能なのは、あるいは唯一確定しうるのは、主体的条件の可動範囲で、自からの志向を確定し、客観化すること、物質化し、提示するという個的なささやかな周期をつくり出していくことではないかと考えた。

いずれにしろ、明日を確認するために手探る状態は、相互に了解し、共有しうる展望を容易に生み出しはしない。それは何よりも、自身の置かれた諸状況に対する互いに確認された分析がない限り、われわれはあくまでも主観的意図にもとづく結合をしか達成できない。

センターの活動形態は、以上の状況に多かれ少なかれ規定されていたと言える。しかしまた、主観への傾斜は反面に閉鎖的性格を分かち難く伴っていること、活動の拡がりにとってこの性格が致命的制約となる決定的な段階があることを、われわれは等

しく確認しなくてはならない。

この点での反省は、センターの今後の活動を考える上で欠くことができないと思う。

三、状況の共有

戦後のアナキズム運動をふり返るとき、ぼくは集団の閉鎖性というこの一点にどうしても引っかかりを感じる。その根拠をあとづけることはまだ出来ないが、ここでは現在われわれの置かれている現状の相互に了解しうる見方、分析という問題を考えてみたい。というのは、あとで一つの問題を提起したいと意図しているからである。また、相互に了解されたというのは、同一の観点に立つという意味ではなく、一致点と相違点を互いに確認することを示すが、こうした手続きなり、段階を踏まえない限り、実りある論争は望めないであろう。しかし残念ながら、われわれはそうした基盤をいまだ形成していないことは、誰しも認めるところであろう。そして、以上の課題をどう受けとめようとするのか、当然に問われるべきことである。

われわれの思考なり活動が、戦後の日本社会の現実に鋭く切り込むことができなかったこと、問題意識の低迷さをわれわれは少しも弁護できない。同様に、われわれがそうした質を受け継ぎ、（※）脱皮できずにいることについても弁明の余地はない。

（※）われわれの世代のある人々は、旧アナ連との断絶を主張し、自らの出生をスターリン批判に求めている。思想的経緯は各人各様であり、その意味ではアナ連があったからアナキストになるという転倒した見方を別にすれば各様であろう。しかし、アナ連とその活動があったという事実は、その評価の如何にかかわらず、避けえないもの、むしろ踏まえるべきものとして、ぼくは考えている。

こうした事態の原因を辿ることも必要な作業である。しかしより以上に、現に気づく注意を要する諸側面、諸傾向を摘出しなくてはならない。思想的理論的なあいまいさの温存、感性への逃避、具体性（現実）を喪失した論議といった側面を払拭するための活動を見据えなくてはならない。

例えばかつて、イオム四号の合評会で、「革命者の組織」に対し、次のような意見が出たと報告された（イオム五号）。「特に新しい組織論上の見解が発表されているわけでなく、一般的・常識的な線にとどまっている。この程度の組織論的問題なら、われわれの間ですでに討論ずみだ」というもの、それに対して「アナ連内部での運動の蓄積がまとまった形で、より若い世代の前に提出されていないこと、そのことを等閑にしてこの翻訳を一般論としてしまうことには問題がある」との意見が出されたと言う。おそらくアナ連に関与したであろう年長者に多かったという前者の意見ほど不毛なものはないと思う。同時に、そうした対応のなかに戦後の運動が分かち難く伴っていた体質を見る思いを禁じえない。誰がどういう現実的背景、問題意識に駆られて何を提起しようとしているのかを理解しえない、理解しようとしないで放棄している――理解しているなら、その対応は内容に即した形をとるであろうし、そこからは前向きの課題が出てくるであろう。そしてこの一場面を、戦後日本の社会的現実というより大きな場に移し換えてみる誘惑に対して、誰が異議を唱えるであろう。

極言するなら、こうした事態の底に横たわる自己限定的な努力なり営為の怠慢と欠

如を自覚することが課せられている。一つひとつの問題を、他に転嫁することなく自らが引き受けること、応え提起すること、試み、思考されたことを開示すること。そうした事柄の集積が、先に触れたわれわれの共通の基盤を形造るものであると考える。

こうした問題意識のもとに、理論上の一つの試みを提出したい。これは研究センター、本誌同人によって着手されつつあるが、その背景にあるのは、

1. 現在われわれが直面している理論上の課題として、どのようなテーマ領域があるのか。
2. それらのテーマ各々に対して、どれだけのものを現在われわれはもっているのか。
3. 以上の確認のもとに、今後のどのように取り組むのか。

といった思考である。

以上の脈絡のもとに、「われわれの綱領問題をめぐる課題」（仮称）は、その意図を次のようにまとめている。

「これまで、われわれは戦後アナキズム運動史、六〇年代分析（戦後日本の政治・経済・社会の動向と六〇年以降の左翼運動――安保以後の新左翼・反戦・べ平連・大学闘争・全共闘などと、七〇年代における変質の分析）という二つの大きなテーマを意識してきた。それらは、いずれも着手もしくは構想の段階にすぎないが、それらと関連した位置を占めるであろうテーマを、それらに加えて提起する。

このテーマのもとに意図されるのは、現在および今後の諸活動・運動を展開していく上で欠くことのできない、理論的な枠組みを仮設すること、その全体像を把握すること、そしてわれわれの理論上の構築物を支えるに不可欠の基盤をつくろうとすることにある。

ここで〝綱領問題〟と題したのは、綱領という形式が、以上の諸課題を要約的に網羅すると考えたことに由来し、同時に、既存の左翼諸綱領の批判という形でのアプローチを考えたからである。

われわれは、この枠組みを固定したものとは少しも考えないが、あらゆる問題を投入し、網羅し、出来うる限りの相互関連性を表示したいと考えている。

そして、その作業と平行し、現在われわれが入手しうる各テーマに関する最良の成果を利用しつつ、われわれの志向と分析のもとに、その実質の形成を始めたいと思う。また願わくば、各個人の個別活動が、こうした試みを介在して、相互の関連性と刺激、協力、批判を見出していくことを期待したいと考えている。

すなわち、まず綱領という形式を使って、理論上の枠組みを仮設すること、それに加えて、現代が孕む諸問題の摘出と、そのための基礎的資料の整理編集が具体的な仕事として取り組まれるはずである。そして、仮設の批判と改組、資料の充実、さらには個々のテーマ内容を構築するという中心的な仕事は、今後の活動をまたなくてはならないであろう。ただ、提起者としての期待の一つが、個々の営為が相互の存在と関連を認知し、協力と批判を通じてより高い成果がもたらされればというところにもある。

四、運動の地平

昨年来、京都・東京・名古屋を中心に進められている全国組織の活動に関連して、本誌四号で「全国連合への批判的提言」としていくつかの問題点を提出した。その後

関西地方の「準備会ニュース」三号にそのことにふれた発言があったが、ぼくの読む限りでは「提言」として受けとめられていないようなので、あえて触れることはないと考えている。

ただ本稿の意図に関連して補足しておきたいことがある。その一つは、運動の「地域的分断」という状況認識である。例えば「戦後日本のアナキズム運動は、ほとんどの地域において常に地域、学園、職場等にのみ閉じこもった形の、結果的には排他的な運動しかなしえなかったという状況認識から出発しなければならない」という一節（小三木氏）を引いてみよう。この指摘が重要であることは言うまでもない。閉鎖的、排他的な小集団、個人が散在するという形でしか運動が存在しなかったという意味で、その見方は正当であると確信する。しかしその状態を地域的な「分断」とみるならば、今日につながる状況を規定しているより根本的、本質的な要因を欠落することになるのではないか、と考える。その要因が何であるかをぼくはまだ提出できないが、それが組織的というより思想的な質にあるように思う。もちろんこれを人間的性向に求めることは問題を放棄することに等しい。

そしてこの点での認識を踏まえた活動が必要なのではないだろうか。どの領域で、どのような形態での活動かは多様であり、また等価である。ただ、そうした諸活動が分散的形態をとったとしても、思想的課題としての共通の基盤をもつことが、個別性や地域的枠組みを貫ぬくものとしての何かを形成するにちがいないと考える。

第二に、組織上の問題からすると、連合が共同行動の可能態として存在するとぼくは考えるのであるが、その見方からすると、連合を形成する単位集団の現状においては前節のことは一層強力されるであろうということである。これは〃下からの組織〃あるいは〃上からの組織〃という図式とは無縁であり、他に表現を求めれば思想集団としての自立ということになる。

論旨の一貫しない書き方となったが、それぞれ現在のぼくにとって欠くことのできない内容をもっている。次号では、こうした志向のより具体化されたものを発表したいと思っている。

編集部から

次号より〈読者の声〉の欄を設けて、読者と編集部のそして、読者相互間の意見の交流の場としたいと考えております。本誌の内容、編集方針への意見、感想、批判をはじめ企画に関する要望などがありましたら、ふるって編集部までお送り下さい。

また読者諸君が、直接・間接に関わっている運動、研究テーマに関する紹介、呼びかけ、および論文等も〈投稿〉の欄を設けて、読者の発表の場とする予定です。活性に満ちた読者の〃叫び〃を誌面に結実させ、真に今日的課題を担うべき思想・運動の構築のために、本誌をその空間的拠点として育てていこうではありませんか。

さらに読者相互の、および編集部との種種の情報交換の場としての〈潮流〉の欄の充実のため、個人・グループ等で発行されている新聞や雑誌、パンフレット、ビラを本誌編集部まで送って下さい。相互の刊行物の交換を原則としたいと考えております。

送り先＝東京都千代田区神田神保町二・三二
大同会館内　現代思想社気付
アナキズム編集委員会

SIC通信

CIRA・NIPPON
国際通信部

〝アジアのアナキズム運動〟をスローガンに出版されている英文雑誌「リベーロ・インターナショナル」については、すでに月刊「リベーロ」誌で紹介されているが、そのグループが次の二つの活動を行うことになった。一つは外国文献の入手と紹介の業務であり、もう一つは外国へ活動報告、ニュースなどを送る翻訳業務である。

L・I ブックセンター要綱

〈目的〉自由社会主義社会の実現を目指して活動している同志諸君に外国の文献の入手の便宜をはかり、同志諸君の学習及び思想活動に協力することを目的とする。

〈活動〉(1) 時に応じて外国で出版されているアナキズム、アナルコ・サンジカリズム、リバータリアニズム、自由社会主義、ウーマン・リブ運動、コミューン運動、評議会主義、情況主義等々の運動のグループが出版しているパンフレット・機関紙類を少しずつ、編集者の独断で選んで、定期的にリスト化して紹介する。

(2) 入手可能な文献に関してはさらに詳しいリストと、できれば少々の解説を付して紹介する。希望者には日本円換算の上、手教料を加えて入手の代理業務をも行う。(前金の有無及びその額はそれぞれ明記する。)

(3) L・Iグループに寄贈された本あるいは安価で入手した本のなかで販売可能なものに関しては、リストにして発表し、希望者に販売する。

(4) 希望者にはL・Iグループに送られてきた文献類の中から、必要なものを選び出して実費でコピー・サービスを行う。

(5) お探しの文献、または「こういう傾向の本を……」といういろいろな相談にもできるだけ応じます。

(なお詳細については、650-91 神戸中央郵便局私書箱1065 CIRA・NIPPON SIC気付 L・Iブック。センターまでお便りを)

L・I ニュース・センター

ロンドンにあるIAT(インターナショナル・アルヒーフ・チーム)は『ミット・タイルング』(MIT TEILUNG)という手書きのミニコミを月刊で出しています。これには世界中のアナキストの動き弾圧の様子、いろいろな活動の知恵や教訓などが報告されています。あなたも投稿してみませんか。あなたの運動の様子、国家権力の弾圧の動き等を、L・Iニュース・センター(住所はブック・センターと同じ)まで送って下さったら、翻訳してAITに届けます。発送された号は必らず投稿者に送ります。最近では、東アジア反日武装戦線の活動のクロノロジーが紹介されています。希望者にはサンプル・コピーを三百円で差し上げます。申し込みはブック・センターまで。

投稿

現代社会福祉の情況

遠矢　厳

社会福祉といわれる領域ほど、あいまいで偽瞞に充ちた領域は、そうざらにはないだろう。世界史的にみても中世ヨーロッパに於て、はっきりと体制の防衛機構として登場してきた貧民法の成立過程のなかに、きわめて原初的な形態でその本質が露出しているのをみることができる。福祉という概念そのものが、現在では悪臭にまみれた体制権力の排泄機能を表象するものとして存在していることはあきらかだ。

現代社会福祉の到達しえた地点とは、その体系の深部に社会的抑圧装置としての核を堅固に内包しつつ、多様な歴史的状況に対応しながら、それ自身としての純化過程総体そのものとしてあるといえよう。歴史の屈曲と状況の転覆という回転木馬にまたがり、いくたびかの変身を装いつつ無限に自己増殖を遂げてきたこの「民衆の救済者」は、そのしたり顔の仮面の下に「民衆の血ぬられた抑圧者」としての暗黒の相貌をひたかくしながら執拗な身がまえを持続しつづけてきた。

社会福祉という女神は、その半陰陽的性格の故に、歴史の反動期には支配層お気に入りの魔法の杖を気どり、革命の昂揚期には民衆の友として立ちあらわれ、あわよくば偽革命家をも気どりかねない度しがたい白痴的高慢と身のほどしらずの虚栄心を持ちあわせているのである。そしてこの社会福祉という女性的半陰陽神は、そのふたなり的に徹底したあいまいさの故に、つねに支配層の兇暴な白刃を覆いかくす「ビロード製の鞘」として在った。つまり底辺民衆の暗黒の殺戮者、収奪者としての位置と本質を隠ぺいする洗練された匂やかなヴェールとしてのみ存在しつづけてきたといえる。また民衆の自然発生的な爆発力、反乱へのエネルギーの永続的な去勢執行人としてありつづけようとする、この社会福祉という領域の内実を形成するものとして、一群の偽学者、体制権力の寄生的茶坊主的社会科学者の発生史が一方にはあった。こうした権力の忠実な職人群である彼等の手によって、現代社会福祉の理論体系は、あたかも巨大な蜂の巣の如くあくまで精妙にかつグロテスクに仕上げられてきたのである。

日本社会事業（福祉）の形成過程と構造についても、今日、多くの学者たちの見解が存在している。あの救世軍的しかつめらしさと、あのラッパの響きにも似た滑稽さを混合したような、それでいて社会科学的装いをてらうことについてはひどく敏感な、例の特有の調子は共通的なのだが。けれども日本的貧民抑圧装置としてのそれについ

て、あれこれと微分的積分的に解析するというのではなく、きわめて乱暴に一発の爆弾によってその偽善の厚壁を打ちくだくならば、たちどころに単純明解なその灰色の背骨が露出してくることはうけあいである。中世期農民叛乱を基底としながら近代底辺プロレタリアート民衆の暴動、蜂起へと深化していく民衆革命の全体過程に対する、あれら支配層の無限に底深い恐怖感が案出した民衆差別分断の構造を理念的に補充していくものとして、それは登場してくるのである。しかしその在り様は、あたかも、かの喜劇名優チャップリン演ずるところの一場の喜劇を連想させる。ガラス屋が息子を使って、夜になるとオフィス街のビルのガラス窓を小石を投げて破壊してまわり、昼間そのガラス屋は愛想笑いを浮べながら新品のガラスを売りつけて稼ぎまくるという、あのあくことなきブルジョア魂の普遍性を。

明治期ブルジョア支配権力の富国強兵政策は結果としておびただしい貧困層、底辺プロレタリア、アウトロウ的叛逆者群――土地を失った農民、失業者たちの形成を促進した。やがてそれは秩父蜂起、米騒動をひとつの触媒としながら現代革命への胎動を開始しはじめるのだが、それに対応しつつ支配権力は、ヨーロッパ貧民法の歴史的成果たる近代社会福祉の方法と技術を無媒介に導入することによって明治以後の日本の社会事業は、あわただしく展開された。

第二次大戦後の社会福祉事業は、既存の構造を分解再編させながら、極度にアメリカナイズされた社会福祉の方法と技術を武器として、再び不死鳥の如く誕生した。あくなき収奪と抑圧のあるところ、必然的に「社会福祉」は権力支配層の聖なる後見人として招かれる運命にあるといえる。

「高度経済成長――列島改造計画」などという、キンキラキンの幻想が、もろくも崩壊しはじめたとき、日本ブルジョア権力の民衆支配の新たな目玉商品として登場してきたもの、これがつまり、古くてつねに新しい「魔法の杖」のひとふり、いわゆる安定成長、「福祉国家」幻想にほかならない。

現在日本民衆の底辺層には、未曽有の体制破壊のエネルギーが充電しつつある。支配権力は、まさに自らの危機としてそれを意識すればするほど激しく絶望を深めていかざるをえない。やがて荒れ狂い自らの心臓を喰い破ってくるかもしれぬ民衆への不安と戦慄、そしてまさしくその「狼の如き」相貌に直面するとき、彼等支配権力に出来得ることといえば、その後生大事に抱えこんだ「魔法の杖」を、ここぞとばかりヒステリックに打ち振るばかりで、他になすすべがないのである。

現代日本民衆の生活構造は、無数の亀裂からおびただしい血を流しつづけている。障害者問題、難病問題、あらゆる公害による犠牲、老人問題、住宅問題、失業、一家離散、生保世帯の激増、慢性疾患による経済的破局、神経病の蔓延、等々。そしてこの亀裂は何物によっても癒やしがたいほどに深いのである。ひとつの傷が癒えると、別のふたつの新しい傷を受けざるを得ないというような情況下にあって、解放に向うべく底辺民衆の水路はどこにあるといえるのか。

ミニ社共連合政権としての萌芽構造をはらみながら、「みのべ革新都政」が首都圏に登場してから約九年になろうとしている。

この期間に彼等の手によって形成されつつあったものこそ、「福祉国家」の原構造にほかならない。このプロフィルの中に「福祉国家」の左翼的ヴァレーションとしての「労働者国家」の幻像を、人々は容易に視ることができるだろう。

旧ブルジョアあづま都政は、その徹底した貧民法的恵与的福祉行政の具体的産物として、収容管理型福祉施設の建設と運営を存続させてきた。それらは首都圏近郊を中心として、あたかも累々たる墓標の如く、暗々としつつ立ちならびながら、戦後ブルジョア独裁とその中央集権構造的行政機能の外壁を形成していたのである。戦後日本資本主義復興期の無惨な人肉廃棄物＝不再生労働力の汚物処理工場としてのそれを明確に自己目的化しつつ、構造的深化を遂げてゆくこのような戦後日本福祉行政機構の展開過程は、まさに国家権力の強大化→高度経済成長→帝国主義的再編強化の過程と表裏一体的関係にあったといえる。ステップバイステップと確実に跳躍していく六〇年代から七〇年代への国家権力の「人柱」埋葬行政としてそれはあったのである。そこに貫徹されているものは、あらゆるものを中央権力の人身供養として機能する以外に存立しえない国家構造の露呈であったといえよう。

帝国主義的再編過程としての「高度経済成長――中央集権的超工業社会化」の急速な展開は、富めるものと持たざるものとの、より徹底した階層分化をもたらした。さらに、持たざるものの下に、その存在をさえも拒否されているものとして、最底辺層としての民衆、いわゆる「棄民」層を形成していく。まさにそれは非人間化した権力的行政福祉機構＝社会的排泄器官を通過しながら、どろどろと排出されつづけ、底辺の暗闇に沈澱、蓄積されてきたのである。

こうした状況に対応して、既存の福祉行政機能が、もはや有効的に権力操作をなし得なくなったときに、「左」の片隅から体制権力の永久的補充者として登場してきたものこそ、わが社共連合――みのべ革新都政の本質的機能であるだろう。既存の中央集権的福祉構造を破砕する作業を意識的にサボリつつ、改良的政策を最大限に対置することによってブルジョア権力を救いあげ、のみならず自らの「社共共同戦線政府――ボルシェヴィキ型労働者国家」の射程内に機能しうるものとして、現存福祉構造を閉じこめていこうとする政治的野心をはっきりと視なければならない。わが首都圏「みのべ革新都政」下の福祉行政は、まさに来たるべき日本労働者国家における、新たな、しかも最も有効的かつ強大無比な社会的民衆抑圧管理装置のひとつとして位置づけられた社会福祉機能として在り、それの先取りとして、構造化されつつあるといえる。

現代社会福祉のこのような情況の中から、底辺プロレタリアート棄民層の永続的叛乱への、決定的水路を切り開くものとして、現代社会福祉構造の解体が再度問われなければならない。転倒した権力的社会福祉構造を、自立的民衆の、より直接的参加をもって機能する真に開かれた自主管理構造へと創出していくことによって、民衆自身の「社会福祉」へと奪還していく必要があるだろう。

今日、そのような闘いをより現実的な射程へと引き絞り得る戦闘的福祉戦線の登場が、きわめて少数ながら、日程にのぼりつつある。